

日本林業はよみがえる

梶山恵司著

評・三浦 佑之（古代文学研究者）
立正大教授

中学校を卒業するまで、三重県の山奥で杉や檜に囲まれて暮らしていた。春になると、雪の重みで倒れた若木に縄をかけて起こし、整地された山に入って小さな苗を植えた。

具体的再生プラン



日本経済新聞出版社
1800円

今や、その木々も50年を経て太くなった。ところが、いつの頃からか花粉をふり撒く嫌われ者となり、建築材としても相手にされなくなる。

もう山林経営に未来はないのかと思っていたら、福音の書が出た。著者は、民間企業で環境問題や森林・林業の再生を研究していた人で、今は国家戦略室に入って、林業政策を担当する内閣審議官である。その専門家が、今こそ日本の森林を再生させるチャンスだとして、林業経営の具体的なシステム作りを提言する。

なぜ今か、その説明には説得力がある。戦後、日本中の山に植えられた木が30年から50年を経て大きく育

っている。それらの資源を「皆伐」して使いきるのではなく、持続可能なかたちで「間伐」しながら山と木を循環させることで、安定した産業として林業経営を成り立たせる、その二度とないチャンスが今なのだと言者はいくり返し主張する。

もちろん、実現するのは容易ではない。林業のために設計し張りめぐらした路網の整備、専用機械の開発と利用、全体を見わたしてアドバイスできる優れた人材の確保、行政組織の整備、採算のとれる大規模経営など、課題は山積している。しかし、林業経営の先進国ドイツをモデルにしなが、具体的な数値を用いて森林の再生プランが語られると、書名にある「よみがえる」という断定的な口調と相まって、信じてよいのではないかと思わせる。

日本の山林を現在のようにしたのは、戦後の林業政策だった。だから疲弊した山を再生させる責任が政府にはあるのだ。たとえ政権が変わろうとも、補助や助成によらずに自活できる、持続可能な山林経営のための政策を、ぜひ確立してほしい。

そうなっはじめて、山の木を植えて育てた親たちの苦勞が報われる。

◇かじやま・ひさし 1954年生まれ。著書に『マルクのユーロ戦略と円の無策』（ダイヤモンド社）。